

## 現代における仏教の意義

講師 佐藤直実  
宗教情報センター研究員  
四天王寺国際仏教大学非常勤講師

### 1 基礎知識の確認

【信仰と学問】

**仏教** 2500年前にインドで始まった宗教  
開祖：釈迦牟尼仏(如来) 仏  
教義：大蔵経、パーリ三蔵など多数 法  
教団：出家と在家からなるサンガ(僧伽) 僧団

**仏教学** 仏教とは何か？を知るための学問

- ・ 仏教徒(僧侶)による經典解釈
- ・ 仏教徒以外の人々による研究

【釈尊の一生 <三仏会>】

降誕会 4/8 2500年前、釈迦族の王子として誕生  
29歳で出家・修行(瞑想や苦行)  
成道会 12/8 35歳で成道(さとりをひらく)  
梵天の勸めを受け入れ、布教を開始  
涅槃会 2/15 80歳で入滅

### 2 釈尊はなぜ出家したのか？

【誕生の時の不思議】

アシタ仙人の預言

「この子は王位を継げばインドの理想の王(転輪聖王)に、出家すれば精神世界の王(覚者)となり、人類を指導救済するだろう。」(『スッタニパータ』、『仏本行集経』)

以後、父・スドーダナ王(浄飯王)は、釈尊が王宮の生活を捨てて出家しないよう、非常に恵まれた環境を与えた。

【最初の悩み】

10才の頃に立ち会った農耕祭

人々は、掘り出された虫を小鳥がついばみ、その小鳥を猛鳥が食べる様子を見て、喝采を唱える。王子は、命のはかなさを知ると同時に、命あるもの(衆生)同士が、他の命を軽んじる弱肉強食の有様を歎く。

「どうすれば、生き物が皆、平和で幸せに暮らせる世界を作ることができるのだろうか？」

(中阿含『未曾有法経』、『マハーサッチャカ経』など)

最初の瞑想

【出家のきっかけとなった悩み】

14才の時の外遊 <四門出遊>

東門...老人 南門...病人 西門...死人 北門...聖者

「誰も老病死から免れることはできないのに、なぜ他人の老病死を見て、私は悩むのか。」

「欲望は楽しみが少なく、苦しみや悩みが多いものである。私は欲望よりもさらに善いものに到達した。」

(中阿含『羅摩経』、『アリアパリエーサナ(聖求)経』など)

出家を決意した時に、息子の誕生の知らせを受ける

【出家のきっかけとなった背景】

- ・ 生まれてすぐに生母を亡くす
- ・ 老病死への不安感
- ・ 贅沢な暮らしのはかなさ
- ・ 大国に隷属している自国の、いつ侵略されるか知れない危うさ
- ・ 息子の誕生(執着する象徴)      これがきっかけとなり、29才の時に城を出る

### 3 釈尊は何を悟ったのか？

【禅定修行】

アーラーラ・カーラーマ...無所有処定  
ウッタカ・ラーマプッタ...非想非非想処定 (中阿含『羅摩経』, 『仏所行讃』, 『方广大莊嚴経』など)

【苦行】

ガヤー山における修行...断食、裸形、息を止めるなど  
(『マハーシーハナーダ(大師子吼)経』, 『ジャータカ』など)

【菩提樹下の瞑想】

苦行の放棄...スジャーターの供養 <涅槃の供養>  
マーラの誘惑...1.欲 2.不楽 3.飢渴 4.渴愛 5.憂鬱と眠り 6.怖畏 7.疑惑 8.偽善と強情  
禅定によって、三明を得、覚者となる。

【四禅】 -釈尊の修した禅定-

初禅 欲望と悪の心を離れる  
二禅 あらゆる雑念を静め、精神が完全に統一された喜びにひたる  
三禅 二禅の喜びをも超越し、身に楽しさだけを感じる  
四禅 楽も苦もなく、憂いも喜びもない、ただ安らかで清浄な境地 **三明**

【三明】 -釈尊の獲得した智慧(不可思議力)-

天眼通 未来を見通す力 因果応報の理を知る  
宿命通 過去を知る力 全ての苦のもとが迷い(無明)であることを知る  
漏尽通 迷い(無明)のもとを取り去る力(智慧) 現在の迷い(無明)や煩惱を断ち切る  
神変通, 他心通, 天耳通を加えて六神通ともいう。

【四諦】

苦諦 苦に関する真理 四苦(生老病死)は苦である  
愛別離苦, 怨憎会苦, 求不得苦, 五蘊盛苦を合わせて八苦とも言う  
集諦 苦の原因に関する真理 誤った欲望・執着が苦の原因である  
滅諦 苦の断滅に関する真理 欲望・執着を消すことが苦の断滅である  
道諦 苦を断滅する方法に関する真理 **八正道**

【八正道】

正見 正しい見解, 信仰  
正思 正しい思惟, 覚悟, 判断力  
正語 正しい言葉遣い  
正業 正しい行為  
正命 正しい生活  
正精進 正しい努力  
正念 正しく記憶し, 継続すること  
正定 正しく集中すること

#### 4 釈尊は我々に何を残したのか？

【釈尊の最後の説法】

**小乗の『涅槃経』**...釈尊の最後の旅の客観的記述  
王舎城～クシナーラーまでの数ヶ月間と葬儀・仏塔建立

**大乘の『涅槃経』**...釈尊の最後の説法に焦点をあてる  
悟り(涅槃)の真の意味の解説(最後の晩の質疑応答)、釈尊入滅後の記述なし

共通する内容

- ・ クシナーラー(クシナガラ)にて一夜のうち説かれる
- ・ 最後の供養者、チュンダ < 般涅槃の供養 >
- ・ なすべきことを為し終えたので般涅槃する

【小乗の『涅槃経』】 = 『マハーパリニッバーナ経』

今後は、私の説き遺した法(教義)と戒律(教団規則)とがお前たちの師である。  
諸々の事象は移ろいゆくものである。怠らず努力しなさい。  
禅定のまま般涅槃した釈尊は、火葬され、遺骨をおさめた仏塔が造られた。

【大乘の『涅槃経』】 = 『マハーパリニルヴァーナ経』

如来(仏)は内にある(常住)。  
全ての生き物には仏性がある。どんな極悪人(闍提)でも救われる。  
涅槃は恒常であり、楽であり、有我であり、浄である。  
如来(仏)に供養を受け取ってもらうことは大変尊いことである。

#### 参考文献

- 水野弘元 『釈尊の生涯』 春秋社、1960(新装版1972)。  
渡辺照宏 『新釈尊伝』 大法輪閣、1966。  
中村元 『ゴータマ・ブッダ - 釈尊の生涯 - (原始仏教1)』 (中村元選集11) 春秋社、1969。  
静谷正雄・勝呂信静 『大乘仏教(アジア仏教史インド編I)』 佼成出版社、1973。  
平川彰 『インド仏教史』 上下、春秋社、1974。  
奈良康明 『インド仏教史I, II(世界宗教史叢書7,8)』 山川出版社、1979。  
増谷文雄・服部英淳篇 『仏教とはなんだろうか』 (道心叢書1) 道心会出版部、1981。  
高崎直道 『仏教入門』 東京大学出版会、1983。  
長尾雅人・井筒俊彦・上山春平・服部正明・梶山雄一・高崎直道 『インド仏教 1-3(岩波講座東洋思想8-10)』 岩波書店、1988-1989。  
菅沼晃編 『インド編、講座仏教の受容と変容1』 佼成出版、1991。  
大法輪閣編集部編 『ブッダ・釈尊とは - 生涯・教えと仏教各派の考え方』 大法輪閣、2001。  
竹村牧男 『大乘仏教入門』 佼成出版社、2003。  
小林正典写真集 『ブッダの風景 - インド八大聖地巡礼 - 』 毎日新聞社、2005。